笑わない昆虫学者

坂本 光一

デビッド・ブルームは、世界で最も高名な昆虫学者でしたが、それ以上に、「決して笑わない昆虫学者」として有名でした。数限りない栄誉に輝きながら、そのどんなに晴れがましい授賞式でも、彼はいつも何かいらだっているような、あるいは悲しみに耐えているような表情をたたえていたのです。

人々は、彼の不幸な生い立ちが原因だろうと噂しました。彼が8歳の時、一家が乗った自家用車が崖から転落して、彼の両親と4歳になる妹が死んだのです。確かにそれ以来、彼は笑わなくなりました。だから、人々の噂は80パーセント正しかった。でも、それだけが原因ではなかったのです。

8歳のあの事故の日から、62歳になるまで、彼はひとつの夢を追い続けていました。あの事故の日。失神から覚めた彼は、押しつぶされた車の中に、血に染まった両親と妹の姿を見ました。彼は車から投げ出され、草の上うつ伏せに倒れていました。頭から血が流れて、少しずつ力が抜けて、目が見えなくなっていく。「このまま僕も死ぬんだ」と思いました。その時です。「おまえは生きなければならぬ」。すぐ近くで声がありました。彼は首を動かして周囲を見ました。が、誰の姿も見えません。「おまえには生きてやるべきことがある」。目の前の草が、かすかに動きました。彼のかすんだ目に、草の先にとまっている小さなテントウムシが見えました。

再び目を覚ました時、彼は病院のベッドにいました。包帯をされた頭が痛かったけれど、彼には色々なものが見えました。彼の両親と妹が死んだこと。それを医者から彼に隠しているのは、彼が生きていく気力をなくすのを心配しているからだということ。でも、そんな心配は無用でした。もうその時、彼には生きる目的と強い意志があったのです。あの虫が言った、自分が生きてすべきことを探し実行すること。そして、言葉を探し出すこと。その日から、それが彼の生涯の目標になったのです。

退院した彼は、あの虫を探すことから始めました。あれは、妄想や神のお告げなどではなく、間違いなくあの虫が自分に語りかけたのだ。なぜとは言えませんが、彼には確信がありました。幼かった彼にも、話をする虫がいるというのは信じがたいことでした。でも、それを否定することは、自分自身を否定することでした。話をする虫は必ずいる。そして、それを探し出せば、自分が生きてすべきことを知ることができる。

彼は虫を探し続けました。10年、20年、そして50年。世界中の虫を

坂本 光一 / さかもと・こういち

1953年、千葉県生まれ。東京大学卒業。88年、『白色の残像』で第34回江戸川乱歩賞を受賞してデビュー。他に『二重の罟/ダブルトラップ』(講談社)、『ヘッドハンター』(日本経済新聞社)など。現在、三菱商事株式会社に勤務。

本作品は、コスモ石油株式会社発行『ダジアン』に掲載されたもの。

観察して、虫について書かれたあらゆる本を読みました。そして得た知識をまとめて発表すると、人々は口々に賞賛して、色々な賞をくれました。気がつくと、彼にはケンブリッジ大学の名誉教授という肩書まで付いていました。しかし、そんなことは彼にはどうでもよかったのです。どれだけ昆虫学者として実績をあげようと、彼の目的はあくまで、あの話をする虫を見つけること、彼が生きてすべきことを知ることだったのですから。

年をとるに従って、彼の苦悩は深くなっていきました。人生の残りが少しずつ少なくなっていくのに、未だに彼は目標を達成することができなかったのです。60歳になった時、彼の体は癌にむしばまれていました。彼は、余力を振り絞って虫を探しました。でも、どうしても、あの話をする虫に出会うことはできませんでした。

62歳になったある日、彼は自分の死期が近いことを悟りました。病院のベッドを抜け出し、車を拾って、54年振りにあの忌まわしい事故の現場に立ちました。彼の大切な家族を奪った崖は、雨で暗く濡れていました。彼は、ゆっくりと崖を下りました。その時、足場が滑りました。彼は落ちていきます。あの日と同じように。ゆっくりと目を開きました。雨が倒れた体を濡らします。体のどこにも感覚がありませんでした。「ここで死ぬんだな」と彼は思い、目を閉じました。

「そうだ、おまえはここで死んでいく」。突然の声に驚いて、彼は目を開きました。目の前の草に、テントウムシがとまっていた。「今話しかけたのはおまえか」。テントウムシが微笑むのがわかりました。「おまえだけが話ができるのか」。彼の生涯の謎が今解けるかもしれないのです。彼は最後の力を振り絞って尋ねました。「いいや」。テントウムシは静かに言いました。「すべての虫が話をする事ができる」「すべての?」「虫だけではない。草も、石も、そして死んだものも、みんな話することができる。人間が心を開きさえすれば」「心を開く?」。その瞬間、彼にはすべてがわかりました。人間も、虫も、草も、石も、魂も、すべては同じものなのです。すべては語り合うことのできる友達なのです。彼は、とても平和で穏やかな気持ちになりました。

「おまえはよくやった」。懐かしい声がありました。「父さん」。そこには、父が母が、そして小さな妹が立っていました。「世界中の人に虫のことを教える、それがおまえのやるべきことだったのよ。よくがんばったわね」

翌日、彼を探しにきた人々は、決して笑わなかった彼が、穏やかな笑みを浮かべて死んでいるのを見て、悲しみ、そして不思議に思いました。